

農耕者と漁労者の比較心理 (3)

——通過儀礼における靈魂観

A Comparative Psychological Study of Farming and Fishing Villagers:

Attitudes toward Life Rituals and Ideas of the Soul

服部純子

国際基督教大学教育研究所 研究員

Sumiko Hattori

Research Associate, ICU Institute for Educational Research and Service



農耕者と漁労者, 通過儀礼, ライフサイクル, 身体と靈魂

FARMING VS FISHING VILLAGERS, LIFE RITUALS, LIFE CYCLES, BODY AND SOUL

Abstract

Purpose

This study of culture and personality was designed to investigate the comparative psychology of farming villagers and fishing villagers, in particular, attitudes toward life rituals: rites of birth, adolescence, marriage, critical years, and death. In their everyday life, they cherish life along the life cycles of 'hare', 'ke' and 'kegare' through rituals.

Method

Research was based on reference to Japanese festivals, and to essays

on death, in order to determine the typical commonalities and differences among fishery and farming people. Results were obtained by research on five points of view of life rituals. Discussion considered different and common psychological views and ideas of the soul.

Results and Discussion

Both communities were sensitive toward the way of handling a child's birth because they basically believed that the child was just emerging from the world of life after death. Birth rites appeared to focus on fixing the unstable baby's entry into a healthy human member of the villager. Farming people made a child birth's visit to the shrine earlier than fishing villagers did because they regarded a baby's entity less 'kegare'. Children in fishing villagers organized an association which helped them to grow up socially.

Farming and fishing villagers' younger generation would spend time in a special house learning what life is and exchanging social communication. In the fishing village, both a man and a woman could involve in love affairs freely. Although both villages regarded women as laborer or house keeper after marriage, women in fishing villages seemed to have a little more self-identification.

In bad luck disposal rites, they tried to rid themselves of bad luck during their 'bad luck' years by socializing, inviting people, by throwing away money or daily items such as a comb. Especially fishermen took a serious view of critical years in order to avoid the evil fortune of 'kegare'.

Fishing people historically have adapted funeral ceremonies to release unpurified soul from the dead body. For farming people, death was more unclean than that of fishing people. It required a longer period of pacifying and purifying a dead person's soul of 'kegare'.

[問題]

現在、通過儀礼は形骸化された中で、七五三、成人式、結婚式、葬式の行事がとり行われている。葬送儀礼にしても、かつての隣近所や村の組織を中心にした相互扶助による葬儀から葬儀社を中心にしたものへと移行し、また同様に、成人の祝い、結婚の祝いも、サービス業者に依頼してとり行ってもらうことが日常化してしまい、儀礼の本来のもつ意味が見失われている。

ひと昔前は、貧しいながらも農耕や漁労の生業を支えながら、社会と人との成長をうながし、感動を分かち合う通過儀礼が存在した。成長過程において、年齢層の異なる子供たちとの交流や社会への参加儀式があり、ひきこもごもの笑いや悲しみの中で人生観がにじみでるような生活があった。また反面、家・家制度の重圧感や、村の監視や庇護のもと、村落内におけるつきあいが重んじられすぎたために、複雑な人間関係の中で、自分らしく生きられず、個を埋没させたまま生きざるを得なかったことも事実だった。

かつて生業の中で生きていた人は、過酷でもある自然の中で大地を踏みしめて育ち、例えば、農業者は、五感を働かして身体から伝わるインスピレーションを感じながら作物の生育にあたり、漁業者は、航海上の危険をすばやく察知し、勘を働かしてピンチを免れたりしたものだ。インターネット社会の形成期である今日、至るところでハイテク化がうながされ、ますます現実感が伴わないヴァーチャルな日常生活を、人々は送ることを強いられている。若者は現実では求められない快樂を求めて、麻薬体験に走ってしまったりする。社会で求められている仕事にいきがいを得られずに（失業の事例も含め）、自らを自殺に追いこんでみたり、あるいは生きていることそれ自体に過度のストレスを感じて、殺人（通り魔事件や親の子殺し等）を犯してしまったりする。

自殺の増加、種々の犯罪、そして援助交際、学校不登校、親の幼児虐待の数々の事例等を、1999年は数多く抱えて2000年を迎える。オウムもライフスペースの事件も特殊なものでなく、その社会の構造の在り方——見

える範囲のものでしかみようとせず——の矛盾を露呈させた事例といえる。

その背景には、荒涼とした心の問題が山積みにされているからである。過渡期を迎えている現在、新たなる世紀に向けての人々の心の改革が、自由な個と調和した社会の訪れをもたらす鍵を握っているように思われる。

今回の研究では、人生の折り目である通過儀礼（誕生及び幼少期の儀式、成年式、婚姻、年祝、葬儀）を基軸に生業者（農業者と漁業者）の心理を言及していきたい。ハレとケをうまく使いわけ、日常の生活にリズムをつけてきた昔の人々の知恵をのぞいてみたい。

【目的と方法】

人は幾つものハレとケの日を迎え、また日々ケガレをとりながら人生を送っていく。通過儀礼を通して、誕生という最初のハレの関門を経た後、成年式で一人前と認められ、婚姻で夫婦であることを承認され、年祝でケガレをとり、ケの行事である葬儀で生を閉じていく。

今回は、一連の本研究の第三回目の研究として、農業および漁業の生業を営んでいる人々と通過儀礼を、文化とパーソナリティの観点からみていくことを目的とする。

文献（主に民俗学的立場から記述された日本の祝事（1977-1978）、田村勇（1990）、新谷尚紀（1992）、五来重（1992））を参考にした事例研究とする。生業形態の異なる農業と漁業に従事する人々の心理を、通過儀礼の観点からみていく。

(I) 誕生及び幼少期の儀式、(II) 成人式、(III) 婚姻、(IV) 年祝・厄年、(V) 葬送を基軸に、生業に従事する人々の儀礼のあり方をまとめる。また、その構造がうきぼりにされるような説明にする。漁村といっても、純漁村というより半農半漁の形態が多い。五つの通過儀礼についての結果にもとづいて、両者の特徴及び差異の心理を比較し考察していく。なお、地域における差は、生業での差異におけるよりも顕著な場合もあることを留意しておきたい。

[結果]

[I] 誕生及び幼少期の儀式

人間界への加入の承認を、成人になるまでの間に、幾段もの関門を通過させて行き、社会における大人として成長できるようにする行事であった。

(A) 帯祝^{オビイワイ}

帯祝は、通例妊娠五ヶ月目の腹帯時に行われ、生児の生存権の承認であった。嫁の母親が餅等をもって婚家へ赴いたり、犬は安産するから、丈夫に育つからと、戌の日に催された。農村では一般に、妊娠して大腹になっても働き続けさせ、働かないとお腹の子が大きくなり過ぎて、かえって難産になるといった。

(B) トリアゲル・ヒキアゲル

産婆が誕生したばかりのものを取り上げる（トリアゲル）ことで、霊魂界から人間界に引き上げた（ヒキアゲル）。すなわち、生児はまだ人間として扱われなかった。かつては嬰兒殺しが罪に問われることなく、また間引きは当然のこととして行われた。育てないことを、むしろ、「かえす」、「もどす」などといった。

(C) 産神

産神には、安産や子育てに霊験あらたかとされる神仏のお札や護符と、民間信仰のものがみられた。神札は神棚や居間に貼り、護符は女や子どもが身につけ、また妊婦は腹帯におさめた。民間信仰の産神は呪術的で、「箒神が来ないうちは子は生まれない」といい、お腹から子を箒で掃き出すという意味で箒を「産神」の依代とした。とくに顕著なのは、便所の神を産神とし、妊婦は便所をきれいにすると安産であるという慣習であった。

(D) 産屋

出産を穢火^{ケガレビ}といい、産屋で別火をとり、買い物や水くみは誰かにしてもらい、外出しなかった。出産は穢れがあり、通常二十一日間の産屋明けまで、神前に立つことは禁じられ、七日間は「火が悪い」といって産婦のいる家では世間のつきあいをしなかった。

とくに漁村では、昔から「生き火は死に火よりきたない」といわれ、お産や月の障りの血による火の穢れをことさらに忌んだ。舟板一枚の下を地獄とし、海が荒れた場合、血の穢れに怒る神のせいと信じられていた。出産時は、最も厳しく忌み、夫は特に出産に立会うものではないとされ、他家で宿泊し別火をとった。

(E) 後産

後産である胞衣^{エナ}を処理するにあたって、農村ではとくに厠や堆肥に埋めるのは、早く腐らせることで、産の穢れを早く除去できるとした。通常は日の当たらぬ場所に埋めて人に踏まれないようにした。漁村や海岸地方では、川原や浜に埋めるところが多かった。また、胞衣に石をのせて置き、自然のうちに波がさらうようにしたり、胞衣を汚れ物に包んで砂浜に埋めることが多かった。

(F) 産飯

子の誕生後すぐに飯を食す習慣を産飯といい、就中産婆が食べたり、産神に供え、生児と産婦にも供えて食べる慣習は広くみられた。特に、近隣の婦人も一緒に食し、男性も一緒に飲食に加わった。また、できるだけ多くの人に食べてもらうほど、将来大きな世帯をもてるといい、一升以上も食べつくす場合もあった。この儀式により、人間の仲間に参加でき、誕生を村内に認めてもらう手段とされた。

(G) 湯初め・産湯、産着

出産三日目の祝いは、生児が湯を浴びる重要な儀式の日であった。婚家で産をした場合、実家から祝いの産着が届けられた。「三日の湯」を境に、

それまで布切等に包まれていた生児が、手の通る着物を着る日でもあった。漁村の方では、三日目の祝を大事にし、とくに産婆を招いてご馳走した。

(H) お七夜・名付け

生後七日目に、赤飯をたいて、産婆、仲人、親類知己を招いて祝宴を催し、命名・名付け祝をした。祝いの振舞いは初子に限るところが多かった。父親、祖父、あるいは神主等が名付け親になったりした。農家の方では、名前がもつ意味は一生を左右するということで、例えば、米の収穫が乏しいときに、飯を食べることに苦労しないように、「米蔵」とか名付けた。

(I) 宮詣り

通常、男児は三十二日目、女児は三十三日目に、母子で初宮詣りをする。この儀式は、氏神に氏子として認められてもらうもので、神官が氏神札を与えるところもあった。漁村の方では、一般に農村部ほど宮詣りを重視しなかった。農村部では、三十日目か五十日目にすませるが、漁村の方では七十五日目から百日めというところも多かった。また、宮詣りをしないところも多々あった。

(J) 食い初め・^モ^モカ百日目

百日目に、食初めの式を行う。赤ん坊には食膳を設け、赤飯に焼き魚、それに歯固めとして小石をそえて祝うところが多かった。「百日の一粒食い」といい、たとえ一粒でも成人と同じ物を食べさせて、丈夫に育つよう願いを託した。

(K) 初誕生

満一年目の誕生の祝を重視し、誕生餅をついて、親類知己にわけて送るところが多く、それに対し、お返しの祝品が届いた。また、初誕生を過ぎても、一人前の社会人として承認されるまでは、幾つもの関門をくぐった。

(L) 帯解き・紐解き

七歳に帯解き・紐解きの祝があり、産婆をはじめ、仲人、近隣、親類縁者が招待され盛大に催された。この七歳から紐のない着物に帯をしめるようになった。ちなみに、三歳のカミオキの祝では、仲人、産婆・トリアゲ、親戚を招き祝宴を催した。五歳の祝は男子のみで赤飯で内祝をした。いずれも子供の成長を祝う儀式であるが、とりわけ長男や初子に催された。

農村部では、数え年三歳になると、紐落としといい、里方から兵児帯を贈られたりした。また、漁村では、五歳の祝いに重きをおき、氏神で祝詞をあげて貰い、親類もお神酒を供えた。

(M) 七歳の祝

各地に共通しているのが、七歳は災厄に遭い易いという信仰で、生育の一つの折り目とされてきた。「七つ前は神のもの」ということわざがあり、七歳未満で死んだ子は、葬式も簡単にすます風習があり、また、神の依りましに選ばれる風習はあちこちにみられた。この七歳の祝を境に、仲間に加わり集団的訓練を受けることになった。特に、漁村では、子供組の組織が整い、この年齢から加わった。

(N) 子供組

青年団への加入前には、子供組あるいは子供連という、通例十四歳の子供を頭にし、オヤカタ、チョウロウ（長老）・タイショウ（大将）またはコドモカシラ（子供頭）などと呼ぶ結合に、子供は加入した。特に、子供組は、ドンド（左義長）を子供が管理している土地ではかなり活動的であり、その他に種々の祭事を手伝った。とりわけ漁村では、子供組の活動は熱心で、若者組と共にその起源が古かった。

【II】 成年式

一人前として待遇され、また村人として自覚する人生の重要な折り目と

して、十三歳から十五歳前後に行われる儀式に成年式があった。

(A) 成年式

男子は成年の祝を境に、まわし・兵児帯・禪が贈られそれを締めた。成年式を経ると、成年男子として結婚の資格を得たことを意味した。また、成年式後、相互扶助を目的とした、村の制度を左右する若者組・青年団に加入し、神事に参加したり、葬儀を手伝ったりした。女子の方も、この儀式を境に、娘組に加入し一人前と承認され、腰巻きが贈られた。

漁村で顕著なのは、この式の前後を境に、入れ墨をした若者がみられ、自ずと成年式を経たことを示していた。

(B) 若者宿

青年団の集会所である寝宿や若者宿での活動は、漁村の方が活発であった。かつては青年団に加入した者は、この宿で寝起きし、共同作業をしたりした。また、この宿においては、加入後の一、二年間に、服従ということ、結婚や人生について、生きていく上で必要な知識を教わった。

漁村の方では、網宿ともいい、未婚男女の交際が自由であり、恋愛が芽生えやすく、農村に比べとりわけその傾向が顕著にみられた。結婚前の男女にとってこの若者組は、通らなければならない一つの段階であった。

農村部では、若者たちの家を順番に農閑期には稲束一把ほどをもって集まり、縄をなってから後は飲食共にし、夜這いまですることもあった。女子は気の合った仲間が宿に集まり、縫い物などをした。結婚前の男女にとってこの若者組は、必ず通る関門であった。また、農村において男女の付き合いは、祭りとか盆踊りの輪での交遊や、農作業の手間返し、そのほか夜なべの手伝いなどで自然に恋が芽生えた。しかし、親が決めた相手ではなく、恋愛で連れ添った相手との結婚は、歓迎されないことが多かった。

〔Ⅲ〕 婚姻

成年式を終え、一人前と認められた男女は、結婚により一家の主人と主婦になり、村構成の一単位、すなわち村人となった。結婚を機に、若者組や娘組から退くのであった。

(A) 婿入り婚

村内のみで婚姻が行われたころ、農家では、事実婚があっても娘は貴重な働き手であったので、当分の間、親元で農作業に従事させ、男の方が毎晩通って来た。男の方の母親が衰弱するとか、隠居しヘラの権利を譲渡するときになって、はじめて輿入れをする婿入り婚が、かつてはなされていた。

仲人をたてて結納や婚礼の準備をととのえていく運営の嫁貰いがあったが、村内だけで婚姻が行われた間は、若者組が仲人役となり管理する場合が多かった。甲乙村で婚姻を結ぼうとした場合、つまり部落外の者と結婚しようとする場合は、若衆が邪魔をしたので、まず酒を購入して若衆仲間の了解を得なければならなかった。

(B) 門入れ

漁村の場合、婿が長く出漁中や、または働き手が必要なときは祝言をしないで、あらかじめ嫁を連れて来る門入れ婚を行った。門入れがすめば、実際の夫婦生活に入って、婚家先で葬式があった場合は、婚家の者として葬式に加わった。この門入れの場合は、後に婚礼の式を行った。

また、婿方では婿をはじめ男たちが漁に出て不在の場合に、女だけの祝宴が開かれ、嫁と姑が盃を交わすこともあった。婿方の近親者が嫁の家へ行き、親に貰いうけたい旨申し入れ、ついで仲人の女房や親戚の女たちのみで嫁貰いに行った。嫁は、婿方の仲人の女房、あるいは母親、嫂、女友達などとともに婿方へ掛き、婿不在のまま祝宴が開かれた。

(C) 出嫁および足入れ婚

農村では、出嫁の場合、農作業の手伝いをしに嫁が婚家に通い、子の誕生直前に籍を入れたり、また、とくに結婚式を挙げることなく、生児誕生後の孫抱きのときに、一緒に祝いの宴を開いてもらう程度だった。春もらって秋返してしまう田植え嫁や、収穫期の刈嫁など不安定な結婚が多かった。

女親が娘を連れて相手の男の家へ行き、簡単な振る舞いにあずかる、足入れ婚も出嫁と同様であった。農作業に著しく手間と人手がかかるので、嫁の労働力を試し、封建性の強い家風に馴染めるか、姑との折り合いがつくか等を試すために、本祝言まで期間をおいたのであった。また、足入れ婚は、使用人などを嫁にしようと試す場合にもとくに行われた。

[IV] 年祝・厄年

厄年とは、災厄をこうむるべき年であり、婚期も厄年という年回りを避けた。むしろ人生の節目で祝う時ともされた。

(A) 四十二歳の厄払い

男子の四十二（死に）歳と女子の三十三（惨々）歳を大厄とし、親戚や友人を招き盛大な厄払いの宴を開くところが多かった。農村でも漁村でも、この厄払いは盛大にとり行われ、また四十二歳の厄年にはには御輿かつぎをすところが多く、嚴重に物忌みをすることで神事関係の役割を果たし、災厄をまぬがれようとした。また、物を配ることで厄を落とした。

とりわけ漁村では、四十二歳の男子については一生の中で最も盛大に催された。親戚や知己を招き二、三日から、家によっては一週間も祝いをする事もあった。厄年の人は夜通し飲食し、早朝に家の出口にて四方を拝み、さらに村の十字路で賽銭を撒いて四方を拜んだりした。

(B) 他の厄年

この他、男子は二十五、六十一、七十七、八十八、女子は十九、三十七などを特に厄年とする習慣があり、上述の厄年の盛大さほどはないにしても、年頭に親類、知己、近隣を招いて宴を張ったり、年頭に神社で神職から祈祷してもらって、厄払いをする風習が多かった。とくに、漁村や沿岸地方では、この行事を徹底させ、厄年のものは、氏神を参詣したり、物を配ったり、あるいは櫛や財布など身につけたものを、四辻や道傍に落として後を振り返らずに帰り、厄落としとする風習があった。

(C) 六十一歳

六十一歳と八十八歳は男女ともに厄年とするが、むしろ長寿を喜ぶ意識が大きかった。とくに六十一歳で祭りの頭屋を務める事例が多かった。農村の方では、六十一歳の還暦を、「キノマタ年」といい重視している。「六十二歳になった人は、子が山へ背負って行き、木の股に挟んでおいてきた」という、姥捨て伝説による名称といわれている。親戚や知己を招いて盛大な祝宴を催した。

[M] 葬式

人の一生の折り目は、葬式という人生の幕を閉じる日の儀礼で終了した。葬式には、人の死および霊魂に対する考え方が象徴的にこめられていた。

(A) 詣墓と埋墓

かつては詣墓と埋墓の両墓制であった。石塔の詣墓がなかった場合には、供養は臨時の祭壇で行った。また、村中に墓は一つしかない場合でも、納骨したり先祖供養に行く所は、例えば、東北であれば、青森の恐山、宮城県の納骨の霊場である松島、瑞巖寺の洞窟であったりした。

(B) 風葬

風葬の古い形の阿古屋は、今でもまだ海岸や島などには一つの層をなして残っており、とくに海岸の風葬は、沖縄、南西諸島で顕著であった。最近まで風葬を行っていたのが久高島^{くたか}であった。遺骨を通して靈魂を祀る方式の一形態が、沖縄・奄美で行われている洗骨の風習であった。風葬して骨化したものを塩水で洗って、壺に入れて葬った。

(C) 土葬

農村のほうでは、土葬の場合は最初、靈魂が出たりしてこないよう石で封印した。土墓に置かれている六地藏は、墓場から死者の霊が出てこないための、呪術的な防衛をする仏になった。また、土葬になっても殯^{モガリ}の慣習が踏襲され、枕石や布団石などや、息つき竹、花籠、四花、天蓋、四門、墓に置く笠とか傘は、みんな殯の継承物であった。

(D) 火葬

火葬になっても、火を焚くという殯の風習を継承した。火葬だと半日で肉体を骨化し穢れを清めてしまえた。葬式後、燈籠を置いて四十九日間、毎日、遺族が火入れを行うところも各地にあった。灯籠を墓の横に立てておくのは多いが、火は招魂するのでかつては殯で用いられていた。靈魂が荒霊として飛び出さないように、留めておかなければならなかった。災いを起こす恐れがあるので、常盤木^{トキワキ}の枝を立てて依代にしていた。

(E) 枕飯^{マクラメシ}および忌^ヒの飯^{メシ}

死者に枕飯を供え、また、家人だけで、親族さえ交えず、死人と一緒に供えたのと同じ食物を食べた。この忌の飯で、死者との関係が切れたことを意味した。海岸地方、例えば、壱岐の島では葬式の時にはヒデといって、死んだ人の血縁者が、米を一升ずつ持参する風習があるが、忌の飯同様な意味があった。

(F) 葬儀の準備

喪家には、死亡の知らせを受けた隣近所の講中や組の家の者がかけつけ、通夜から葬式一切をとりしきり、家の者は手伝いも口出しもしなかった。湯かんは死者の子供や兄弟など最も近い血縁関係者たちが行き、身内の女性たちが縫った白い晒しの死装束を着せて納棺した。戒名をすまし、葬儀の祭壇は多く座敷に設けられて、僧の読経などが行われ、会葬者の焼香が終わってから出棺となった。

(G) 忌明けと弔上げ

埋葬後の七日間は毎日墓参し灯明をあげた。また、埋葬当日の晩とか六日目の晩などに死者の霊が返ってくるといわれ霊を追い払う風習があった。四十九日は忌明けで、僧侶、親類縁者、隣近所の人たちを呼んで読経供養と会食が催される。四十九個の小餅を作りわけて食べた。弔上げは、一年、三年、七年と法事が続けられたが、七年以降からは省略されることが多かった。また、三十三年忌あるいは五十年忌の最終年忌は重視され、それ以後死者は、神様になるとされた。

[考察]

(I) 誕生及び幼少期の儀式に対する態度

丈夫な子に育つようにと日を選択し催された帯祝 (A) を経たということは、この段階でこの子の魂はあの世からこの世に無事に移行することができたといえる。

産婆は、誕生したばかりのものをトリアゲ (B)、まだ人間として扱われなかった嬰兒を靈魂界から人間界にヒキアゲ (B) たので、この世とあの世の媒介者とも考えられ、巫女の存在に近い (関東の祝事、1978, p.134) のだろう。また、嬰兒を殺したり、胎児を間引くのを当然としていた背景には、かえす、もどす、育てずとし、嬰兒や胎児がまだ人間界に属していな

いからという意味合いが強かった（柳田、1978）からだろう。

産神 (C) には、神社仏閣の御札や護符で、安産や子育てに靈験あらたかとされるものと、庶民信仰の中であがめられる箒神、便所神等とがある。前者が神頼み的存在であれば、後者の場合は、日常使用したりするものや、身の回りのものに宿るとし、非常に身近な精霊を産神とみなしている。妊婦は安産を祈り便所をきれいにし、お腹から子を掃き出してくれる箒を産神の依代とし、日々敬虔な気持ちで過ごし子の誕生を待ち望んでいる。

出産 (D) を穢れ日とし、とくに最初の七日間は火が穢れているとして別火をとった。とくに、漁村では、「生き火は死ぬ火よりきたない」とされ、お産の血によって火の穢れをことさら忌んだ。潮で垢離をかいて、禊ることが必要なことで、産の忌は重くみられた。夫は他家に滞在し妻と別火で過ごしたり、また、妻は産屋で出産滞在し、穢れを夫に移さないように気をつけた。その背景には、生業である漁労に穢れを持ちこむことを避け、（前回の本研究参照、1999）浄化思想を根強く持っていたからである。

胎衣・後産 (E) の処理にあたって、農民と漁民は異なった方法をとる。前者は、日の当たるところを避け、人に踏まれないようにして埋めたが、土葬的な埋葬の仕方である。地中に黄泉の世界を想定して埋めているかのようにである。後者は、自然に波がさらうように石の上に置いたり、汚れ物に包んで砂浜に埋めるということは波にさらわれることが前提である。これは風葬、殯の発想に近い葬送法である。また、波にさらわせるのは、漁民は海の彼方にあの世・常世を感じているからだろう。

産飯 (F) を、産神に供え、産婆が食し、生児と産婦にも供えて食すだけでなく、近隣者にも食してもらい、できるだけ多くの人に食べてもらうほど、その子が育ってから大きな世帯をもてるというのは農民の願いだろう。いずれにしても、この祝いを境に、それまで靈魂界に属していた生児が人間界に参入でき、村内に承認される存在になってほしいという願望が見られる。

湯初め・三日の湯 (G) を境に、手を通す着物を着ることで、人間界入りを祝している。とくに、漁村の方では、この三日祝に産婆を招いて祝き、人間界への誕生を果たした生児とその児を人間界入りさせた産婆に敬意を

払っていることがわかる。

お七夜・名付け (H) は、人間界への加入式の一つであり、これからこの世で社会参加していくために名を付けてもらうのだろう。とくに、農村の方では一生苦労しないような命名に重きをおいたり、また産飯を多くの人に食べて祝ってもらい、大きな世帯をもってほしいとあるように、この世である人間界への定着を早くから願っていることがうかがわれる。また、胞衣の埋葬でも陽を避けたように、七日目も同様で、まだ霊界に戻りやすい状態で、生児の霊が人間界に固定していないので、霊界に戻る可能性があるからと考えたのだろう。

農村の方が生後の氏子として認めてもらう宮詣り (I) を漁村より早く行い、また漁村では農村部ほどこの時期の宮詣りを重視してはいないことがわかる。しかし、漁民の方が氏神様との密着度が強いことが、前回の本研究 (1999) でも言及したが、どうしてこの宮詣りを重視しないのかという点に関しては、漁民が最も嫌う産の穢れの問題が考えられる。宮詣りでかけるにしても誕生後日数を経てからのの方が、穢れが薄れているという考え方ができるだろう。

百日目で食い初めの儀式 (J) を行うが、歯固めとして小石を添えて祝ったり、一粒でも成人と同様のご飯を食べさせ、丈夫に育つように願うが、百日目というのが、霊界とまだかわり易いのだろう、「もどり」が生じる可能性があると思われているゆえの念押しの儀式ともいえる。

満一歳の初誕生祝 (K) に誕生餅を分けて配りお披めするが、餅の中に宿る靈魂に象徴されるように、人として受け入れてもらえるような儀式ともいえる。

漁村部では五歳の男児の祝 (L) を重視し、親類も動員して氏神で祝詞をあげてもらい、漁民と縁の深い氏神様に承認してもらうことが、不可欠であることがうかがわれる。農漁村いずれにしても、男女児の三歳や男子の五歳の祝を経て、男女児の七歳において紐のない着物に帯をしめさせる祝、とくに長男や初子の成長を重視し、すこやかに育つことを切に願うのである。

七歳の祝 (M) では、「七つ前は神のもの」ということわざ通り、神の依

りましに選ばれたりするが、七歳までの生育過程の中で、その霊界から離れる作業ともいえる。数々の祝いを経るのは、その子の霊魂がまだ霊界に出たり入ったりするので、この世へのその子の定着化を願う儀式ともとれる。とくに、漁村では、七歳から子供組 (N) に加わり、村の祭事に関わっており、村・社会で一人前になる準備段階といえる。

[III] 成年式に対する態度

成年式 (A) を経ると、神事に参加でき、村の大人として男女共に、一人前の扱いを受ける。村自体、若者組の活動により、大いに支えられていた。また、若者宿 (B) と呼び、とくにそこでの活動は、漁村の方が熱心であった。青年団に加入した者は寝起きを共にし、共同作業を行い、また、人生に必要な知識を教わった。男女の交際が自由であり、婚姻前に相手を選択できる余裕があった。農村部でも夜這いが行われたが、男女のつきあいの自由さには漁村に比べ限度があった。

いずれにしても、成年式を経ることで男女の融合が公認され、人の誕生を育む婚姻や家庭の基礎作りが自ずと出来てくる、村社会の構造になっていたことがうかがわれる。

また成年式の前後に入れる漁夫の印である入れ墨は、田村勇 (1996) によると、遭難したときの身元確認ということであり、さらに入れ墨の桃の絵柄等の意味内容に関して言及し、漁夫は、信心深いが功利的な願望が強く、例えば桃の霊力に託し、死んでもなお「水に浮き」浮かばれることを願ったということを指摘している。まさに個としてのアイデンティティを求める欲求が農民より強いのだろう。

[III] 婚姻に対する態度

農家では娘は貴重な働き手であったので、婿入り婚 (A) という事実婚を

行ったり、嫁が婚家に通い、婿方の農作業の手伝いを前提に子ども誕生直前に婚姻届けを出す出嫁 (C) や、農作業への嫁の労働力を試す足入れ婚 (C) が農村での結婚形態の特徴であるが、いずれにしても家の存続への背景に農業という生業への労働力確保の為の要因が大きい結婚でもある。

漁村の方では、長い出漁中に、あらかじめ嫁にきてもらい、働き手の確保につながる門入れ婚 (B) を行った。婿が不在であっても、女だけの祝宴が開かれ、そこには個としての尊重がうかがわれ、農村における出嫁や足入れ婚の個としての存在感のない結婚形態とは、少し異なっていたように思う。その背景には、以前の本研究でも言及してきたように、漁村では封建的な時代社会であっても男女の個としての確立、役割分担の基盤がみられ、農村では男尊女卑的な考え方の土台が根強かったからといえる。

[IV] 年祝・厄年に対する態度

厄年に災厄を被らないように、むしろ祝うことで厄払いを男女共に行っているが、主に、男子の四十二歳 (A) が数ある厄年の中で最も重きをおかれているので、御輿かつぎをしたり、人生最大の祝宴が開かれたりする。とくに、漁村の男子が最も盛大に催す。また他の厄年 (B) の者の厄払いも氏神に詣ったりして、物を配ったり、身につけていたものを落として、厄落としを熱心に行う。その背景には、産の穢れを忌嫌うことにも顕著なように、穢れを生業に持ち込まない心理に如実にあらわれている。

また、六十一歳 (C) の厄を落とすために、祭りの頭屋を務めたりしたが、反面長寿の祝宴を催した。また、一方、六十一、二歳で姥捨て山に捨ててきたりしたが、この世でよく働いたから霊界へのもどりの意味をもつのだろう。

[M] 葬式に対する態度

両墓制 (A) からは、古来からの日本人の霊肉分離の考え方が顕著にうきぼりにされる。これは靈魂と肉体は別々のものと考えていて、死後、遺体から靈魂は離れて行くので、両方を各々に詣るのである。

山折 (1990) によると、風葬 (C) における洗骨の習俗も、死後における遺骸 (遺骨) の処理であって、霊の復活の防止を目的にするものであっただろうという折口説に同意を示している。さらに、山折は遺骨そのものへの論旨を展開する上で、殯期間を死者の魂を呼び戻すための招魂の儀礼と捉える見解 (折口信夫) と死者霊の浮遊を抑えて鎮魂ための儀式と捉える見方 (五来重) の説にも言及しており、いずれの説も遺体から魂が遊離することを前提とした遊離魂の現象を指摘しており、招魂と鎮魂は死霊・荒霊を葬送するのに基本概念と思われる。

農村の方でよくみられた土葬 (C) になると、靈魂が出てこれないようにと石で封印をし、六地藏を設置している。しかし、殯の残存物を置いているところから、鎮魂だけでなく、招魂も行っているのだろう。

死者に枕飯 (E) を供え、また忌の飯 (E) を食すことで、死者との関係が切れるようにし、肉身が湯かん (F) し、死体を清めることや、死装束、他の数々の儀式 (F) は、遺体を火葬や土葬に付す前の儀式として、その遺体や魂が清まることを前提としていることがわかる。そして、上述したように、死者の霊は荒霊であるから、殯・風葬によって一定の期間封鎖したり、鎮魂したり、土葬なり火葬 (D) なりによって、あるいは後の時代の念仏・踊りも入れたりして、生前の罪を滅罪し、浄化していくと、和魂になって、子孫なりに、恩寵的な祖霊となってくる。

土と親しむ農耕者にとり、民俗学で通常いう、霊は山の彼方という考え方 (山岳信仰) もみられるが、より身近な土中に埋葬するのは、死魂=穢れ、また死者・靈魂への固執から出発するので、その荒魂を浮遊させずに、土中に封じこめておこうという発想が根底にあると思う。そこには、あの世のメタファーをもつ黄泉の国をみるのは一理あることであり、家の相続・存続ゆえに、三十三年とか五十年 (G) という忌む期間を過ぎると、家

に恩寵をもたらす祖霊となるのであろう。穢れを祓い清め鎮魂していくという思想が漁民より強いように思われる。

一方生業形態に移動性の強い漁民にとって、海岸近くで殯葬・風葬が古くから存在した歴史性ゆえに、霊魂の考え方の基本に、既述したように浄化思想がみられる。殯期間をもうけており、遺体と荒魂を風化し、また、生前に罪をおかしているのなら、消失・滅罪させているのである。家、とくに、村落・共同体に恩寵的な神霊となるのだらう。

農民の場合は、とくに生活基盤が農耕地にあるので定住していて、家を存続させねばならない。米をはじめとする農作物は、それ自体常に枯れ、死んで、芽吹く・再生の観念に従事する人々にもたらし、農繁期と農閑期という四季の移りかわりを感じする生活のリズムで成り立っている為に、死とあの世観への思考を多くするのだらう。

遺体は土葬も火葬の場合も、最後は白骨になり、霊魂が宿るという観念がみられる。死者の霊魂はとりあえずはあの世におもむくが、再びこの世に戻ってきては骨に宿る。霊魂の循環のメカニズムで、あの世とこの世を移行しており、そしてまた新たな身体に魂を宿らせ、この世での誕生を迎えることになるといえる。

参考文献：

- 新谷尚紀、日本人の葬儀、紀国屋書店、1992
 小沢秀之他、南中部の祝事、明玄書房、1977
 倉田正邦他、近畿の祝事、明玄書房、1978
 小林一男、北中部の祝事、明玄書房、1977
 五来重、先祖供養と墓、角川書店、1992
 坂田友宏、中国の祝事、明玄書房、1978
 崎原恒新（さきわらこうしん）他、沖縄・奄美の祝事、明玄書房、1977
 田村勇、海の民俗、雄山閣、1990
 都丸九一他、関東の祝事、明玄書房、1977

- 中村正夫他、九州の祝事、明玄書房、1978
藤丸昭他、四国の祝事、明玄書房、1977
三浦貞栄治他、東北の祝事、明玄書房、1978
柳田国男編、日本人、毎日新聞社、1978
山折哲雄、死の民俗学、岩波書店、1990